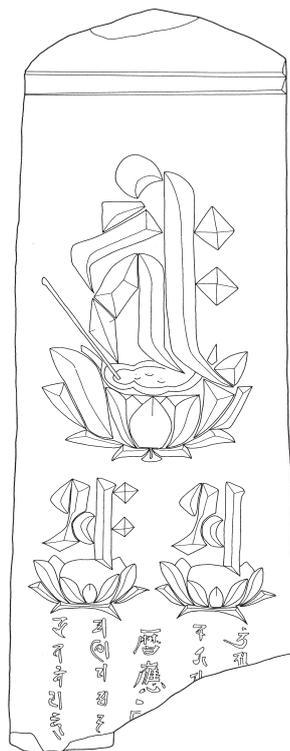


48 暦應在銘板碑

りやくおうざいめいたび



指 定 市有形文化財 昭和57年 3 月 1 日  
 所在地 中 込  
 所有者 正 楽 寺



仏教関係の石造物の一種である板碑は阿弥陀三尊（または本尊だけ）を梵字または画像で表し、外に年紀・願主名・経文などを刻し、死者の供養などに供したもので、鎌倉時代に始まり室町時代に最も流行した。

用材には秩父産の緑泥片岩が用いられたので、信濃では秩父と近接している佐久に最も多く残っており、旧佐久市内だけでも32枚（内4枚が出土地不明）がわかっている。

本板碑は、下部3分の1ほど欠けているが、信州板碑の中でも最も大型に属し、仏体は種子を用いた阿弥陀三尊で、何れも蓮弁の上に乗っている。暦應4年（1341）の年紀を中央に大書し、左右に各2行にわたって梵字による経文が刻まれている。

当資料は、大型である事、その彫刻が極めて念入りで明確である上に、美的要素まで多分にふくんでいるなど、信州板碑の代表的なものと見ることができる。

法量は、長さ85cm、幅31.5cm、厚さ4.2cmである。

参考資料 「板碑」（佐久市板碑図録集）佐久市教育委員会